

# 東京に移り住む

ジュリア・フリードマン Julia Friedman



ジュリア・フリードマン：現職は早稲田大学国際教養学部助教。IPMU博士研究員のデヴィミアン・イーサン夫人。

家族で新しい国に移り住むことは決して簡単なことではない。夫婦両方が働いており、二人ともに良い職を得る必要に迫られる場合は、一層困難である。2007年から2008年にかけての冬に、私の夫がIPMUからオファーを受けたとき、私たちは東京の生活を思い描いて胸をときめかせたが、そこで過ごすことになる3年間、私が何をするかという問題があった。私は美術史で博士の学位をもっているが日本語を話せないので、適当な職を探すとしたら、英語による教育課程で授業科目に美術史があるようなところが唯一の可能性である。しかし、良い職を得ることは決して不可能でなかった。夫がIPMUのオファーを受諾後、たった2ヶ月ほどで、私の同僚が早稲田大学国際教養学部の専任助教の募集広告を教えてくれた。運良く見つかったものであるが、その職は私の専門の現代美術だったので、直ちに応募した。それでも応募が望み通りの結果になるかどうか確信はなかった。2008年3月に東京を訪れた際、私はテンプル大学日本校にも履歴書を置いてきた。大学では常勤の職を募集しない場合でも、しばしば非常勤の教員を必要とすることを知っていたからである。これはうまくいった。テンプル大学のタイラー・スクール・オブ・アート（芸術学部）の教育課程では私の専門分野での2つの科目を教える教員を必要としていた。私は東京に引っ越して1ヶ月も経たない9月からテンプル大学で教え始めた。10月には早稲田大学から面接に呼ば

れ、その後専任の職のオファーを受けた。それ以来、早稲田大学で働いている。私はこれほど速くこれら2つの職を得られたのはとても運が良かったと思う。しかし、特定の分野の専門家、英語で教育・研究ができる人材を必要とする場合、恐らく単に適当な候補者が少ないという理由で、競争は英語圏諸国のように激烈なものではないのであろう。従って、余り多くはないにせよ募集があった場合、有能な配偶者にとってはその職を確保できるチャンスはかなり大きいというのが私の印象である。

また、子供の親としての私の経験は、大部分は肯定的なものであった。私たちが東京に来たとき、息子は5歳半で、幼稚園に通い始めて良い年齢だった。私たちは息子をインターナショナルスクールに入れることにして、時間をかけて探した末、港区の東京インターナショナルスクールに決めた。私の息子は学校が好きではあるが、もし読者のあなたが子供をインターナショナルスクールに入れようと思うなら、潜在的問題が2,3あることを知っておくべきである。第一は、授業料が非常に高いこと（典型的には年200万円程度）である。\* 第二にあなたが学校に通わなければならないかもしれないことである。（私たちの場合、住んでいる場所がスクールバスの経路に沿っていないため、息子は電車で通わなければならないが、乗り換えが1回あり片道45分かかる。）第三に、もし子供が日本語を話さず、あなたが住む地域にほとんど英語を話す人がいない場合、子供を家

に呼んで遊ばせる約束（play dates）や下校後の活動に問題を生じるかもしれないことである。一方、東京での子育てはアメリカよりずっとストレスが少ない。東京は非常に安全であり、住民もとても親切だからである。また、息子は日本に住むことにより豊かな感性を身につけるとともに、国際色豊かな級友達が見せてくれる異なった文化について知識を得ている。彼がこれから受ける教育を長い目で考えれば、そのことにより恩恵をこうむることを私は疑わない。

東京で2年過ごした後、私はここに来たことは個人的にも職業上の観点からも間違いなく適切な決断であったと言えることができる。来日直後に、あちこちアパートを探して回ったり、いろいろ面会の約束をしたりしたが、IPMUの事務部門が助けてくれたおかげで、分かり難かったりいらしたということは全くなかった。ただ一つ私が悔やむのは、日本語を学ぶ機会を作れなかったことである。初め、私は6週間の速習コースで学ぶことを望んでいたが、結局は教育と研究で手一杯で、必要な6週間を捻出する余裕はなかった。英語を話さない人々と意思疎通できないことは東京での私の最大の問題である。従って、もしあなたがここに来る前に日本語を学ぶ時間があれば、是非そうすることをお勧めする。

\* WPIプログラムのガイドラインに沿って、招へい研究者の子女教育のためにIPMUでは一部を補助している。